

2011 年度 あうるすぽっとインターン修了生 レポート集

2011 年インターン修了生 4 名

黒田 千穂、須永 詩織、相馬 希、永尾 めい

研修期間 2011 年 5 月 29 日(日)~2012 年 2 月 29 日(水)

「舞台芸術交流センター」での日々

黒田 千穂

大学で日本文学を専攻している人間が、どうして劇場でインターンをしているのか。周囲の人々に不思議がられることが多かったが、わたし自身も不思議である。しかし、来るべくして来たのだと感じている。

文学研究というものは(学部生のわたしは、まだその入口にすら到達していないかもしれないが)、文学が読まれた痕跡を辿るものである。文学には読者があり、その読者にどのようにうけとられるのか、ということが、わたしの目下の関心事である。文学に限らず、何かを伝える際には、受容者を意識し、場合によっては、どういった印象を与えるか考慮しなければならない。

そういったわたしの関心事と、きちんとした就職活動を行うために社会経験を積みたいという想いが相俟って、わたしは「あうるすぽっと」に辿り着いたのだろう。

思えば、この九ヵ月間は、情報の伝達・発信に苦しむ日々であった。それは、インターン生同士や職員の方々とのコミュニケーションという個々人のレベルだけではない。公共の劇場として情報を発信することは、大きな責任が伴い、公にする前に注意深く精査する必要がある。その点に苦しむことが極めて多かった。

必死に考えた文言や、チラシのレイアウトが却下され、自らのセンスの無さに煩悶・屈託するばかりであった。しかし、インターン期間の終盤、「としまっぷ計画」の広報の仕事に取り組む中で、文言やレイアウトに煩悶する以前に、この情報を誰に向かって発信するのかを明確に意識することがなによりも大切なのだと、かなり遅ればせながら実感させられたのである。

加えて、誰に向かって発信するのかは、わたしの専攻分野での目下の関心事であるところの「読者にどのようにうけとられるのか」という問題と、実は通底していたことに気が付かされたのである。

わたしには、演劇がわからない。わたしは、文学部日本文学科で文学を専攻し、小説を読み、それにまつわる先行研究を読み、休みには映画を観ている—あうるすぽっとでは、そればかりを繰り返し繰り返し、言動で示していた。

しかし、それは逃げである。それも、演劇からだけでなく、文化芸術からの逃げだ。インターンを通して、演劇・音楽・映画・文学などのジャンルに関わらず、色々なモノ・ヒトが、意外なところで繋がっていることを知り、驚いた。繋がる文化芸術のうち、演劇だけ切り離して逃れようとするのは不可能だったのだ。

そんなわたしを寛容に受け入れてくれたのが、劇場あうるすぽっとなのである。いや、あうるすぽっとはただの劇場ではなかった。あうるすぽっとは、舞台芸術交流センターであった。

様々な人や文化が集い交流する場に、文学研究や演劇云々ではなく、つまるところ、わたしは様々な人と出会うために来ていたのだ。



黒田 千穂（くろだ ちほ）

「非日常」が「日常」になること

須永 詩織

まもなく、研修期間の9ヶ月が終わる。私はこのあうるすぽっとでアートマネジメントを知る以前に、社会を知る機会をいただいたと思う。

私は大学で演劇サークルに所属し、制作として活動していたものの専門的に演劇を学んだことはなく、大学3年生からは学芸員になるため大学院進学への勉強をするか、それとも就職活動をするかで迷っていた。そんな時、私は「あうるすぽっと」に出会った。大学3年のほとんどの時間をあうるすぽっとで過ごしたと言っても過言ではなく、様々な刺激を受けた濃い毎日であった。

私は仕事を進めていく中で、芸術を仕事にすることの大変さを知った。制作という仕事は、人々に「非日常」を提供する仕事であると思う。お客様は劇場にわざわざ足を運び、日常生活では得られない特別感を受け取ろうとする。その手間をかけさせている以上、私たちは人々にどんな影響をもたらすのか、伝えるモノに責任をもたなければならない。お客様に芸術とは何かを少しでも理解してもらうため「通訳」として作品とお客様の間に入り、橋渡しをすることからこの仕事は始まるのだと思う。だからこそ、この仕事は演劇が好きであることは勿論、それ以上に様々な物事にアンテナをはりめぐらせ、芸術とは何かを互換できる能力を高めていかなければならず、制作にとっては「非日常」と「日常」の区別がなくなり大きなストレスのかかる厳しい職場であると実感した。よく、仕事とプライベートを切りかえるなどという人がいるが、制作の仕事にそのような形はあり得ないのだと現場を体験して学ぶことが出来た。

私にとってインターンの自主企画である「見せるカラダの表現術」は貴重な経験であった。9ヶ月前はデザイナーの方とやり取りをしてチラシが出来上がることなど夢にも思わなかったが、同時に仕事を前へ推し進めていく大変さと真正面から向き合うこととなり、学生の本分である勉強やバイト、就職活動との両立を強いられた日々を送ることになった。演劇のチラシは映画や美術のチラシと違い、既に完成されたモノを宣伝することが出来ない。だからこそデザイナーの方は私たちの企画に対する想いをチラシで具現化してくれようとするが、私は想いを言葉に換えて伝えることが出来ず、正確に想いを伝えること、そして共有することの難しさを知った。

職員の方々に様々なアドバイスをいただき助けられながらも、この経験は私の自信につながっている。

この9ヶ月であうるすぽっとには様々な変化が訪れた。しかしそれは、社会に出たら誰にでも起こり得るような変化である。しかし、そのような状況の中で職員の方々の仕事に対する様々な想いを目の当たりにし、私はこのインターンを通じてようやく社会に出て働きたいと心から思えるようになった。

好きなことが仕事になる楽しさと、好きなことが仕事になってしまう辛さを実感した9ヶ月であった。



須永 詩織（すなが しおり）

9 ヶ月間の中での気づき

相馬 希

高校時代よりアートマネジメントの業界を志し、大学でアートマネジメントを学んできた私にとって、あうるすぽっとでの9ヶ月の研修は大変貴重な機会となった。大学生活の4年間で学んできたアートマネジメントの知識、実習やインターンシップの機会を経験してきた実務、今までのアートマネジメントの体験を包括するような9ヶ月間となった。

大学の卒業論文、他企業でのインターンシップ、舞台制作のアルバイト、あうるすぽっとのインターンシップ、私の大学生活の最後の1年は毎日がアートマネジメントだった。

知識や、経験、スキル、ノウハウ、そういったものを大学以外の組織で学び、体験し、出会うことは大変重要である。しかし、問題は経験をただ重ねることだけではなく、その時、その瞬間、何かに対して自分自身がどう感じ、どう動けるか、そのことこそが今、一番求められていることだと強く感じた。ただ淡々と業務を遂行し、機械のように働くのではなく、自分の感性、直感をフルに使い、舞台芸術の仕事に向き合うこと。人と向き合うこと。それこそが、今、アートマネジメントを志す学生である私にとって一番必要とされていることだと確信した研修期間であった。

研修期間中、多くの人との出会いに恵まれた。これも大きな収穫である。20代前半、今の私にとって世界で活躍するアーティストと会話をし、現場を共にすることは大変刺激的な時間であった。アーティストと関わることにより、アートマネージャーとしての立ち位置を学び、そして同時に自分自身の未知の可能性を感じることができた。

今まで学生生活4年間の中で学んできたアートマネジメントは、多くの場で役に立った。しかし、あうるすぽっとでの研修では、その経験が打ち砕かれるような体験の連続であった。本当に大切なのは、自分自身がその時、どれだけの気持ち、考えをもって舞台や人に向き合えるか、そして仕事をできるか。そこに必要なのは経験やプライドやスキルではなく、自分自身の感性であり、体力であり、舞台芸術に対しての熱量だということが、この研修で一番強く感じたことである。それが達成できなかった事実はあるが、それに気づくことができた、このことが私にとっての9ヶ月の研修の中での大きな収穫である。

あうるすぽっとでの研修期間、職員の皆さまは勿論のこと、公演・ワークショップに関わった全ての方へ、御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



相馬 希（そうま のぞみ）

一歩踏み出すための9ヶ月間

永尾 めい

幼少期から舞台演劇が好きだった私は、「大好きな演劇に関わっていたい」というとてもシンプルな理由で中学、高校、大学と進路を選び、学生生活を過ごしてきました。けれども長い学生生活も残すところあと1年という昨年春、萎縮し、固まってしまいました。卒業後の自分がどこで何をしているのか、したいのかというビジョンが描けなかったのです。

舞台演劇が生活を立てていく職業として成り立ちにくいこと、好きという気持ちはあっても知識や経験はないこと、これから演劇に関わっていきたいと思うけれども、何をどうすればいいのかわからない、自分に何ができるかもわからない。頑として演劇の世界に突っ込んでいけるわけでもなく、かと言ってあっさり諦めることもできない。そんな私が「これがダメだったら演劇業界には縁がなかったのだと思って、リクナビ・マイナビのお世話になろう」と決意し応募したものが、このあうるすぽっとのアートマネジメント研修でした。

私がこの研修で最も強く感じたことは、インターン生として仕事をするものの立ち位置の難しさでした。インターン生のデスクがあり、パソコンが2台あり、電話も1台あることから、私たちが職員の方々と同じように仕事ができる環境が整っていたと言えます。これはとても恵まれた環境でした。その反面、責任能力が不十分な私たちインターン生で良いのだろうかという疑問に感じるような仕事を任されることもありました。また、インターン生だからという理由で関わることはできないものもありました。その線引きが時にとても曖昧に感じられ、頭を悩ます日々は少なくなかったのが事実です。しかし、悩みを抱えて自問自答しながら過ごしてきた時間は、私にとって決して無駄なものではなかったと考えています。どのように仕事をすればいいのか、何が求められるのか、今すべきことは何か、そして同期インターン生との仕事分担方法、各自の価値観の違いとそれをすり合わせて働いていくこと、どれもこの立場でなければ経験できなかったことで、学生という身分を卒業し、社会人として働く直前の時間として非常に貴重なものでした。

こうして振り返ってみると、私にとってこの9ヶ月の研修は、舞台演劇を始めとする芸術に携わり仕事をした期間というよりも、「働く」ことを改めて考える時間だったように思います。研修に応募する前の自分と今の自分を比べたとき、「何かが出来るようになった」ではなく「出来ないことがあまりにも多かった」と実感し、挫折したことの方が強く残っているのです。そんな未熟な自分を悔しく思う一方で、私が憧れていた世界でバリバリと働いていく職員・現場のスタッフの方々の姿に「私もいつか!」という思いも、よりはっきりと胸に描くようになりました。今までアートを受容する客席側の笑顔ばかり見てきましたが、舞台に立つアーティストたちの笑顔、ワークショップ参加者の生き生きとした表情は悩み苦しむ研修生活の中で、何にも代えがたいものがありました。これらを原動力にして、9ヶ月前の私には踏み出せなかった一歩を踏み出すことができると思います。



永尾 めい（ながお めい）